

占領期の日本で「パンパン」と呼ばれた女性の服飾

“Pan-pan” Fashion in Japan under the Occupation of the Allied Forces

大森 亜樹子
Akiko Omori

被服学科 森 理恵
Dept. of Clothing Rie Mori

抄 録 アジア太平洋戦争終了直後に、日本で「パンパン」と呼ばれていた女性と、その服飾を明らかにすることを目的とする。先行研究等から、パンパンと呼ばれた可能性の高い女性の属性を求め、占領期に撮影された写真や映像から服飾を調査し、あわせて占領期に撮影された映画に登場するパンパンの衣装を調査した。その結果、性売買をしている女性もしていない女性もパンパンと呼ばれることがあり、服飾は、膝丈スカート、占領軍払い下げのジャケット、着物などであったことが判明した。1950年以降はロングスカートなども見られた。パンパンの服飾に特定のスタイルは存在せず、後年の映画や再現ドラマ等に見るパンパンの衣装は、占領期後半の流行であるアメリカンスタイルであり、物資のなかった終戦直後のパンパンの服飾ではないことが明らかになった。

キーワード：パンパン、占領期、ファッション、軍服、着物

Abstract This study analyzes the fashion of women called ‘pan-pan’ in Japan during the Allied occupation (1945-1952). First, it identifies the women who were called ‘pan-pan’ by consulting contemporary and recent literature. Then it explores examples of their fashion in contemporary photos and films. The results are as follows: regardless of their experience in sex work, women around foreign soldiers were often called ‘pan-pan.’ Right after the war, their fashion consisted of a wide variety of clothes including short skirts, kimono, monpe, and military jackets disposed of by the Allied Forces. They wore long flared skirts barely in 1950s. Bright and ostentatious ‘pan-pan’ costumes depicted in recent TV dramas and movies do not represent real ‘pan-pan’ fashion at that time, but rather, American fashion popular in 1950s Japan.

Keywords: Pan-pan, Occupation period, Fashion, Kimono, Military suits

1. 研究の背景と目的

1945年にアジア太平洋戦争が終わり、日本は敗戦国となり、米国をはじめとした連合軍の占領下となった。東京都心の主要な建物等は接収され、連合軍はGHQ（General Headquarters：連合国軍最高司令官総司令部）を皇居近くの第一生命ビルに構え、隣接する有楽町や銀座は国際化が進み賑わいを見せるようになる¹⁾。その直後から、連合軍兵士を相手にした街娼が現れた。夜の女、街の女、闇の女など、

こうした女性たちを遠回しに呼ぶ言葉はいろいろあったが「パンパン」が一番よく使われた²⁾。パンパンと呼ばれた女性たちの服飾を「これが当時の尖端モードであり、パンパンスタイルだった」³⁾と服飾評論家のうらべまことが述べており、以上のことから、終戦直後に現われた街娼の女性が「パンパン」と呼ばれており、その服飾が「パンパンスタイル」であり、戦後最初のストリートファッションであると筆者は認識した。

また、パンパンの存在を多くの人が認知するきつ

かけとなるものに、戦後最初のベストセラー小説、田村泰次郎の「肉体の門」(1947年発表)がある⁴⁾。翌年には映画化され、これまでに舞台、映画、ドラマなどリメイクが繰り返されている。1988年公開の映画のポスターは、有名女優のスリットの入った真っ赤なスカートが印象的であった。映画やドラマ、舞台で着用されている華やかな服飾は舞台衣装であるため、史実とは異なる再現で誤解を生んでいるかもしれない。その衣装を目に焼き付けて、多くの人々はパンパンとはこのようなスタイルだと記憶に刷り込まれている可能性がある。占領下の1945～1952年の都市部において、パンパンと呼ばれた女性たちが、本当はどのような服飾を身につけていたのか、パンパンスタイルとは何であるかを時代背景とともに明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 研究方法

まず、占領期の新聞や先行研究からパンパンに関する記述を抜き出して、この研究の調査対象を明らかにする。

次に、調査対象の女性の服飾を、雑誌「アサヒグラフ」の占領期発行分、および、占領期の女性たちを撮影した写真を収めて占領期以降に発行された写真集『昭和の女』⁵⁾、『写真昭和50年史』⁶⁾、『奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる』⁷⁾、『写真でわかる事典日本占領史』⁸⁾から調査する。

また、テレビ番組「NHK スペシャル 戦後ゼロ年東京ブラックホール 1945-1946」(2017年8月20日放送)内の当時の映像から服飾を観察する。

さらに、終戦直後に撮影された映画「肉体の門」(1948年8月10日公開 マキノ正博監督 吉本映画)と「夜の女たち」(1948年5月26日公開 溝口

健二監督 松竹映画)の中でパンパンが着用している衣装を観察する。

3. 結果

3-1. パンパンが現れた経緯

終戦後に街娼が登場する背景の出来事を表1にまとめた。

日本政府は1945年8月15日の終戦から3日後、連合軍兵士のために特殊慰安協会 RAA (Recreation and Amusement Association) を設立することにした⁹⁾。8月27日にRAAは慰安所第1号店小町園を東京大森にオープンする。その後東京だけで33か所オープンし、最盛期では全国で7万人もの女性が働いていた¹⁰⁾。RAAの実態は写真入りで全米の主要紙に伝えられ、軍人の妻など女性たちの怒りを買ひ、大統領を目指していた、当時のGHQ最高司令官マッカーサー元帥が女性票が逃げることを恐れたこと、慰安所内で性病が蔓延したことにより、翌年3月10日に兵士に対してオフリミット、立ち入り禁止となった¹¹⁾。GHQが公的性売買を禁止したことに呼応して、日本の官僚たちは1946年12月に「女性には売春婦になる権利がある」と公然と述べ、性売買が可能な地域を赤い線で囲み、赤線地帯が誕生した。失業した女性たちは補償もなく、街頭に立ち兵士相手に性売をすることになる¹²⁾。

3-2. パンパンスタイルとは

茶園敏美『パンパンとは誰なのか』によると、GHQが言論統制を行っていた時期に出版された『街娼 実態とその手記』(有恒社、1949年)には、連合軍兵士と交際するパンパンたちの調査結果と、パンパンとして調査対象になってしまった女性たち

表1 占領期の街娼関連事項 (文献2)、文献10)を参考に筆者作成)

1945	8/15	終戦
	8/18	日本政府主導によりRAA(特殊慰安協会)を作ることを決める
	8/27	RAA1号店を東京大森にオープン その後東京だけで33か所オープン
	8/30	連合軍先遣部隊厚木到着
	9/1	GHQ民間検閲局CCDを立ち上げ
	9/11	プレス・映画・放送課立ち上げ
	9/19	プレスコードが定められる
1946	1/22	GHQが日本における公娼制度廃止 半公認の赤線地帯が発生
	3/10	連合軍はRAAをオフリミットにする
	12/2	内務省より赤線地帯が指定される

自身の生の声が集められた¹³⁾。この本を出版するため調査報告書を作成した研究員や調査員の描写には「化粧」「口紅」「華美」「派手」などの共通、類似した言葉、表現があり、このことからパンパンとみなされやすい共通する化粧と服装があることがうかがえる。研究員や調査員がパンパンを描写する共通項を茶園は以下のようにまとめている¹⁴⁾。

【化粧】 濃厚な化粧，口紅や五本の指の爪のはでなマニキュア，どぎつい化粧，ルージュの毒々しさ，風になびく巻き髪，黄色人種におよそ不似合いなルージュ，かきまゆ，の顔にモダン髪。
【服装】 肩から下げたナイロンバック，赤青黄チェックのロングスカート，派手なオーバー，ナイロン靴下，ダンス靴。

これらの特徴はパンパンとみなされていた女性に限るものではないが，どのアイテムも占領期の日本で手に入りにくいことは確かである。それらのアイテムは連合軍兵士からのプレゼントか，接収地内の連合軍向けの売店で購入したもの，もしくは連合軍兵士から闇市に流れたものと考えられる。一般の女性の間では，着る物すら十分にないときで華美な洋装は憧れであったが，それが「娼婦」の女性ならば軽蔑をすることで憧れの気持ちを抑えていたのであろうと推測する。

男性たちは，敗戦後のやむをえぬ現実として，「娼婦」が兵士を相手にするのは受け入れたが，「シロウト娘」や上流夫人が自分たちの意志で外国人の兵士と愛し合う事態は容易に認めがたい現実であった¹⁵⁾。連合軍兵士とつきあう日本女性をみなパンパンとみなして，心の動揺を抑え込んでいたのかもしれない。

当時の人々は，華美な洋装や連合軍兵士の近くにいる女性を，パンパンという言葉でひとくくりにして侮蔑していたのである。この研究ではパンパンスタイルを，連合軍兵士を相手に性売買をしている女性だけでなく，性売買はしていなくとも何かしら連合軍兵士とかかわりのある女性の服飾であると定義する。

3-3.連合軍兵士とかかわりのある女性の服飾

この研究でパンパンと定義した連合軍兵士とかかわりのある女性を，街娼，皇居付近の連合軍兵士に

友好的な女性，RAA で働く女性，連合軍相手のダンサー，連合軍関係施設で働く女性，連合軍兵士の恋人や婚約者の6つに分類し，その服飾を調査して表2にまとめた。主な特徴は次のとおりである。

1950 年の朝鮮戦争以前の街娼には，ミリタリー調のジャケットにハイヒールが見られたが，ミリタリー調のジャケットに関しては，流行ではなく，衣料品不足であった終戦直後の連合軍兵士の払い下げや支援物資であり¹⁶⁾，女性兵士の着こなしがお手本となったボールド・ルックであった。他にも下駄をはいている姿，膝丈のタイトコート，台形スカート，フレアスカート，モンペのようなパンツスタイルが見られた。髪型はパーマが多く見られた。

後の時代の映画の中のパンパンのような，派手なワンピース，ロングスカートなどは見られなかった。

皇居付近の連合軍兵士に友好的な女性や RAA で働く女性，連合軍関係施設で働く女性に着物の着用が見られた。

連合軍兵士相手のダンサーにはロングドレスが見られた。

1950 年以降の兵士の恋人や婚約者には，クリスチャン・ディオールの新ルックを思わせる，ウエストをマークしたロング丈のワンピースやスカートが見られた。

3-4.占領期映画のなかのパンパンの衣装

東京有楽町を舞台にしている 1948 年公開「肉体の門」の服飾は化粧も薄く，娼婦には見えない 10 代の可愛いお嬢さんのようであった。唯一の 20 代の町子の服飾においても，着物姿もブラウスにスカート姿も上品な奥様のようであった。しかし，大阪西成を舞台にしている同年公開「夜の女たち」の服飾は濃い口紅やかき眉が印象的であり，肩パッドの入ったミリタリー調のジャケットやスカーフといった特徴が見られた。どちらの映画もロングスカートは見られなかった。あくまでも映画の衣装であるが，どちらの映画も 1948 年，戦後 3 年目の占領期に公開されているので，史実に近い服飾ではないかと考えられる。

4. 考察

4-1.パンパンと着物

連合軍に近い場所にいる女性に着物がみられたことについて，兵士には着物が好まれたのではと推測

表2 「パンパン」の服飾調査結果(筆者作成)

女性の属性	年	資料名	記事タイトル	服飾
街娼	1946	アサヒグラフ 1946年6月25日 1156号	「扉 何が彼女をそうさせるのか」	ミリタリー調のスーツ, 肩パッド, 膝丈のスカート, 靴下に革靴
		アサヒグラフ 1946年9月25日 1165号	「今どきの若いもの」	膝上丈のフレアスカート, 花柄のフレンチスリーブの膝上丈ワンピース, 靴下にハイヒール, 裸足に下駄
	1947	アサヒグラフ 1947年11月19日 1211号	「終電車考現学」	濃い色のジャケット, 膝丈の明るい色のブリーツスカート
		昭和の女 p.152	「着る物がほしい」	ジャケット, タイトスカート, ハイヒール
		アサヒグラフ 1947年11月26日 1212号	「逆行時代」	ミリタリー調のジャケット, 膝上タイトスカートのスーツ, 裸足に小さな下駄
		アサヒグラフ 1947年12月10日 1214号	「銀座を哲学する」	棒タイプブラウス, ジャケットと膝丈スカートの濃色スーツ, いかり肩の明るい色のコート, ボケットにチーフ, 靴下に革靴
		アサヒグラフ 1948年1月28日 1221号	「忘却の青春 高峰秀子」1・2	前ボタンのノーカラージャケット, スカーフ
	1948	アサヒグラフ 1948年3月17日 1228号	「杉村春子構成「婦人専用車」女だけの車にして」	肩幅のがっしりした毛皮のコート, ストライプ柄のひざ下スカート, 進駐軍女性の履いていた, 5センチほどのヒールに, はき口がハートにカットされたパンプス
		アサヒグラフ 1948年5月12日 1236号	「扉 繁昌記」	半袖襟付きブラウス, 柄物のひざ下スカート, ナイロン製の大きなバック, 小さな下駄
		アサヒグラフ 1948年5月19日 1237号	「街角の傷痍者たち」	厚手のジャケット, ブラウス, 膝丈スカート, 左肩に大きなバック, 裸足に下駄
		アサヒグラフ 1948年6月2日 1239号	「ノガミに生きる人々」	ジャケット, 膝丈スカート, 大きめのカバン, 膝丈の白いワンピース, 淡い色のジャケット, 黒の革靴, 裸足の下駄
		アサヒグラフに見る昭和の世相7 1948年12月29日・1949年1月5日 合併号	「ハマの風太郎」	オーバーコート, 大きなマフラー, 長めのストライプのスカート, 着物の可能性もあり。下駄
	1949	アサヒグラフ 1949年12月14日 1321号	「寒夜行路」	オーバーコート, スカート, 明るい色の上着, 濃色のパンツスタイル, ショルダーバック, 靴下と靴
		アサヒグラフ 1950年6月14日 1347号	「浅草の体臭」	明るい色の長袖シャツ, モンペのようなパンツ, 裸足に下駄
	1951	アサヒグラフ 1951年12月5日 1425号	「尖端風俗五十年史」	白いしゃれたブラウス, 裾に白線が入ったマリン調の膝丈フレアスカート, 白いハイヒールのストラップシューズ
皇居付近の友好的な女性	1945	LIFE in TOKYO 1 LIFE 1945年12月3日号	「Girls are plentiful but money scarce for soldiers」1・2	外出用のきれいな着物と羽織, 足袋と草履 外出用のきれいな着物と羽織
	1946	NHK スペシャル 戦後ゼロ年東京ブラックホール 1945-1946 2017年8月20日放送	タイトルなし	衿付き, 前ボタンの上着, 太めのストレートのズボン
RAAで働く女性	1945	NHK スペシャル 戦後ゼロ年東京ブラックホール 1945-1946 2017年8月20日放送	占領軍専用の売春施設1・2	色鮮やかな羽織 色鮮やかな着物と帯
連合軍相手のダンサー	1946	NHK スペシャル 戦後ゼロ年東京ブラックホール 1945-1946 2017年8月20日放送	「東京ダンサー組合結成大会」	ワンピース, ブラウスと膝丈のスカートで清楚な印象, ハイヒール
			オアシスオブギンザ1・2	赤いロングドレス ピンクのバステルカラーロングスカート, 白いブラウス, ブルーのバステルカラーのロングドレス, 柄物のドレス
	1947	写真でわかる事典 日本占領史 1945年8月-1952年5月 p.236	「東京の美松ダンスホールにて」	床を引きずるロングスカートの胸元が大きく空いているイブニングドレス, ネックレス
連合軍関係施設で働く女性	1947	写真でわかる事典 日本占領史 1945年8月-1952年5月 p.212	占領軍施設で働く日本人1・2	ブラウスにジャケット 無地の着物
		写真でわかる事典 日本占領史 1945年8月-1952年5月 p.213	占領軍施設で働く日本人3	柄の着物
	1948	昭和50年史 p.108	「有楽町にて」	ジャケット, タイトスカート, 大きなショルダーバック, ハイヒール
兵士の恋人や婚約者	1946	NHK スペシャル 戦後ゼロ年東京ブラックホール 1945-1946 2017年8月20日放送	アメリカ領事館に婚姻届を出すカップル1・2	水玉のワンピース, ショルダーバック 色のワンピース
			「伊勢佐木町の米軍家族」	衿付きのツートンカラーのジャケット, 膝下のタイトスカート, オーバーコート, 靴下にツートンカラーの紐革靴
	1951	昭和50年史 p.108	「銀座を歩くGIと超ロングスカートの女性」	花柄のロングワンピース, ショルダーバック, 白のブラウス, 半柄のロングスカート, 黒いハンドバック, 白のハイヒール, 黒のヒールサンダル
	1952	戦後横浜に生きる p.21	「伊勢佐木町1丁目」	衿と袖が水玉模様のコート, 手袋, ハンドバック, イヤリング, 白のヘッドドレス
	1953	アサヒグラフ 1953年1月7日 1481号	呉基地1・2	明るい色のジャケット, 黒のタイトスカート, ハイヒール チェックの衿付きジャケット, パンツスタイル

できる。皇居付近の女性は着物姿のほうが兵士に人気がありと予測して着用している可能性もある。米国の歴史研究者 Sarah Kovner は著書 *Occupying Power: Sex Workers and Servicemen in Postwar Japan* で、連合軍兵士相手の女性たちが着物を着て写っている写真に、次のような解説をつけている¹⁷⁾。

Many Japanese women sought to appeal to servicemen by playing on their fantasies. Even if few had actually trained to be geisha, the “geisha girl” was a common sight in entertainment districts.

すなわち、兵士の妄想を利用したアピールのために着物を着用し、芸者としての修業を積んでいなくとも「ゲイシャガール」として兵士の相手をした女性たちがいたのである。

占領期は、着物が一般に普段着や日常着として着られていた時期であるが、連合軍兵士相手の仕事をするため、意図的に着物を着ていた女性たちもいたと考えられる。

4-2.GHQ のプレスコードとファッション史

GHQ は「民主主義」の世の中をつくるために新聞、雑誌などの出版物やラジオ、映画等のあらゆる報道を検閲していた。その中に「親交（とくに連合軍兵士と日本人女性との親密な交際を指す）」という項目がある¹⁸⁾。占領期に「アサヒグラフ」に掲載された、パンパンと言われている女性の写真のなかに、連合軍兵士の姿が映っているものは 1 件もなかった。パンパンの定義が兵士相手の街娼というのなら、あまりに不自然な現象であるが、プレスコードのため掲載できなかったというのなら合点がいくことである。

終戦の日に朝日新聞社を退社したカメラマンの影山光洋は、占領期に撮影した兵士と女性と一緒に映っている写真をまとめ、『昭和の女 戦争と平和の四十年』を 1965 年に、『写真昭和 50 年史』を 1975 年に発表している¹⁹⁾。撮影当時は発行することができなかったものと思われる。連合軍は、検閲していることを悟られないようなやりかたで検閲をし、メディアを統制する、一種の情報戦を仕組んでいた。その結果、ある種の出来事、ある種の映像は隠され、記憶することさえ許されないまま、それこ

そブラックホールのなかへ姿を消してしまっている²⁰⁾。「ある種の出来事や映像」の一つが、連合軍兵士と日本人女性の親交であったため、パンパンといわれた女性とその服飾の印象がぼやけてしまい、明確な姿が見えてこないのである。そのため洋装史ではアメリカ化という言葉にまとめられているのである。以下にその様相を述べる。

まず、柳洋子の『ファッション化社会史』には「GI の腕によりそったり、すがりついたりして歩いている日本の若い女性（パンパンといいました）は、その多くがパーマネント（ほとんどかけっ放し）、黒いスーツやジャケット、ハイヒール、ショルダーバックで、口紅やマニキュアをしていました。いわばパンパンファッションで日本の第二次大戦後の街はいろどられました」、「GI とパンパン、それを羨ましそうに眺めていた若い女性たちの眼ざし」²¹⁾とあり、パンパンとはどのような意味かを言及せずに服飾を描写している。連合軍兵士の近くにいる女性であることはわかるが、それが性売買をしている関係なのか、恋人関係なのかは読む人の判断に委ねている。

次に、大衆文化論、風俗史として扱われてきた、うらべまことの『流行うらがえ史』では、「巖のごとくがっしりした上半身に、膝上までの短いタイトスカート、買い物袋のようなデッカいハンドバックを下げ、頭に戴くパンカチーフと称するホッカぶり・・・これが当時の尖端モードであり、パンパンスタイルだった」²²⁾と、パンパンスタイルについて言及している。

そして、増田美子の『日本服装史』では、「戦後のアメリカ軍の進駐によるアメリカ式の生活文化の影響が大きかったことを背景に、和装から洋装への本格的な移行が始まったのです」²³⁾と記されており、パンパンの存在は一切言及されていない。

井上雅人は「日本のファッション史研究を大きく分類すると、洋装史、デザイナー史、若者文化史がある。洋装史とは鹿鳴館に始まり、モダンガール、戦後のアメリカナイゼーションを経て洋装が完成したという歴史観である」²⁴⁾と述べている。また、井上の言うデザイナー史は、「デザイナーたちはパンパンたちに対抗し、自分たちこそが洋服の正統な伝導師であると戦いを挑んだ」²⁵⁾と記載があるように、パリモードと洋裁学校の隆盛の歴史が中心となる。そして、若者文化史はストリートファッション

を中心に捉える歴史観であるという²⁶⁾。

戦後の民主主義教育の中で学ぶのは上記のうち、主に「洋装史」であり、終戦直後の洋装のはじまりであったパンパンの存在に触れられることはない。パンパンについて言及している大衆文化論でも、画像はプレスコードにより非常に少ない。終戦直後のパンパンの存在とその服飾が「アメリカ式の生活文化」という表現により歴史の中に埋もれてしまっている可能性がある。

4-3.経済の発展とロングスカートの流行

1948 年上映の「肉体の門」の舞台衣装には派手なドレスやロングスカートは採用されていない。膝丈のスカートやワンピースで、その時代に多く存在する女性の服飾のようであり、際立った特徴は見られない。

ただし、1945 年から 1947 年の連合軍向け施設で働いていたダンサーは、普段着は膝丈のスカートであるが、ダンスウエアとしてロングスカート、ロングドレスを着用していた。貴重なカラー写真には「真っ赤なドレス」があった。当時の証言にも「真っ赤なドレスを着た日本人女性」²⁷⁾とあり、再現の衣装でも赤が多用されているように思う。

一方、連合軍兵士の恋人や婚約者は、終戦直後から当時の日本では入手が難しいワンピースを着用していた。1947 年にディオールの新ルックが発表されてから、日本にロングスカートが登場したのは、日本在住の米国将校婦人やオンリーと呼ばれる兵士と専属の関係のパンパンが、アメリカ本国へオーダーして着用していたからである²⁸⁾。

そのような中、1949 年には衣料統制は綿とスフ以外はすべてはずされ、衣料切符なしでも自由に衣料品が購入できるようになった²⁹⁾。さらに、1950 年 6 月 25 日に朝鮮戦争が勃発すると、経営資源が絶対的に不足していた状態の日本経済は、戦争関連物資の調達で好転していった³⁰⁾。1951 年には東洋レーヨンがナイロン技術を取り入れ、翌年ナイロン製ブラウスが女性の間でブームとなった。繊維産業は急激な成長を遂げ、丈夫で安価な化学繊維の開発が進むと、衣類の素材にも広がりが見られるようになり、1953 年の繊維消費量は、戦前を大幅に上回るまで成長した³¹⁾ (表 3)。

1951 年の銀座を歩く女性はロングスカートを着用しており、流行の最先端と言える。また 1950 年

表 3 占領期の繊維・ファッション関連事項
(文献 16)を参考に筆者作成)

1945	連合軍占領下となる
1946	ニューモードボリス (婦人警察官) 誕生
1947	フランスでディオールのニュールック発表
1948	ニュールックが日本の雑誌で取り上げられる
1949	綿とスフ以外の衣料統制解除
1950	朝鮮戦争が始まる
1951	東洋レーヨンがナイロン技術を取り入れる
1952	サンフランシスコ講和条約により国際社会に復帰

と 1952 年の伊勢佐木町で軍人の恋人もしくは夫と接収地内の連合軍向けの売店で買い物をする女性の服飾はオーダーメイドのような高級感があり、通行人の女性が当時の日本の女性の標準であるとなると、とても上品で高価に見える服飾をしている。

以上のことから、1945 年から 1952 年の占領期には、1988 年公開の映画「肉体の門」の衣装のような、派手なドレスやロングスカートは、ダンサーがダンスウエアとして、もしくは 1950 年以降の流行の服飾として着用されており、パンパンだけが着用している特定のスタイルではないといえる。

アメリカ経由で日本に入ってきたニュールックは「アメリカンスタイル (アメリカン・ルック)」といわれ、ロングスカートが繊維産業の急激な成長を遂げた戦後の女性の流行となった。パンパンと言われた女性たちは連合軍兵士経由で、1948 年から 1951 年の、ほんの 3~4 年だけ早く流行を取り入れただけであり、その後、一般女性が追随したといえる。

占領期の終わりには、経済がうるおい、衣料品が手に入りやすくなり、それは一般の女性でもパンパンでも同じ時間が流れており、一般の女性は擦り切れたモンペを脱ぎ捨て、大量生産が可能で手に入りやすい化学繊維の衣料品をまとうことができるし、パンパンは進駐軍の払い下げのボールド・ルックから、布地をたくさん使うロングスカートを着用することができるようになった。終戦から女性の服飾がどんどん進化していったのである。

4-4.「パンパンスタイル」の確立

1951 年には高峰秀子主演日本初のカラー映画「カルメン故郷に帰る」が上映されている。この映画に関して井上雅人は以下の通り述べている³²⁾。

1951 年の段階では、終戦直後と手に入る布が劇的に変わっているわけでもなく、日本のくすんだ空や山並みから身体を浮かび上がらせようとした製作者の意図と、焼け跡を背景に自分の肉体を目立たせようとしたパンパンたちのもくろみが微妙に重なっており、そのことがまた、二つの衣装を近づけたのだろう。『カルメン故郷に帰る』の衣装からパンパンたちの姿を思い描いても、それほど見当違いではないだろう。

終戦直後と 1951 年では、衣料統制が解除されたり、化学繊維の開発がされたり、手に入る布や服飾がかなり変わっているように思う。日本初のカラー映画に懸ける思いは、日本が復興する姿を国民にアピールする絶好の機会であり、衣装にもカラー映像の美しさを最大に活かせるものを着用したであろう。故郷に到着した主人公の服飾は、膝下のワンピースで鮮やかな原色の赤であり、青空との色のコントラストが美しい。劇中の主人公と友人の衣装はほぼ原色の黄色や緑色である。それは物資の不足していた終戦直後には手に入らなかった服飾である。

1952 年にサンフランシスコ講和条約が発効し、日本は主権を回復している。GHQ 本部が置かれた有楽町を中心とした銀座や丸の内界隈の接収地は解除された。残った米軍は福生や立川、朝霞など郊外に機能移転した³³⁾。終戦直後の物資不足だった頃、有楽町をはじめとする都心にいたパンパンと呼ばれていた女性たちは、連合軍兵士たちとともに郊外へ移動していった。

基地周辺にいた女性たちはロングスカートををはいていたが、それは連合軍兵士相手に性売買している女性や恋人だけがする特別なファッションではない。1951 年には日本国内全体にロングスカートが流行していたと考えられ、服飾が以前のように連合軍関係からしか入手できない高価なものではなくなっていたはずである。占領期の終わりには連合軍兵士とかかわりのある女性と一般の女性たちの服飾に大きな差はないといえる。パンパンと呼ばれていた女性のわかりやすい特徴は真っ赤な口紅と化粧、強めのパーマヘアであるが、必ずしも性売買をしている女性だけがそのような特徴を持っているとも言い切れない。戦中には経済的理由や世間の目で、かけることが難しかったパーマも経済が上向くと同時に皆自

由に楽しむことができた。

復興が進んで豊かになりつつあった時期に、基地周辺で見かける、連合軍兵士の近くにいる女性たちの最先端の流行であるロングスカートなどの華やかな服飾と真っ赤な口紅が特に人々の印象に残り、パンパンが着ている服飾、つまり「パンパンスタイル」と認識されたのである。

占領期がすでに終わっている 1953 年の「アサヒグラフ」で呉基地の特集があり、元キャバレーの女給で駐留軍兵士の妻となった女性の写真がある。日本全国の基地周辺で国際恋愛や国際結婚があり、そのような女性や外国人兵士の隣にいる女性ということで「パンパン」と一括りにされて、その女性のような服飾を「パンパンスタイル」と呼んだ可能性もある。

4-5.考察のまとめ

この研究の調査では、パンパンと呼ばれていた女性や、街娼のような性売買をしている女性のみならず、連合軍兵士の近くで恋人のようなふるまいをしている女性や、米国の裕福な暮らしを享受したような華やかな服飾を身につけた女性であり、人々は羨ましさや軽蔑の気持ちから「パンパン」と認識していたことが明らかになった。

パンパンという言葉は人によって解釈が違うのではないかと推測する。性売買をしていなくとも、派手な服飾や化粧など外見からパンパンと呼ばれていることもある。パンパンと呼ばれている性売買をしている女性も実際は街娼、娼婦、バタフライ、オンリーと分類され、それぞれ生き方も服飾も違い、集団ではなく個としての特色がある。その時代に生きていた人々は、戦後最初に現れた連合軍兵士の近くにいる女性をパンパンと呼び、後の時代の人々がパンパンの服飾を「パンパンスタイル」「パンパンルック」「パンパンファッション」という集団として括り、派手なイメージを作って、後の時代の映画や再現ドラマに採用していったと思われる。そして占領期の 7 年間は経済も急激に発展しており、表 3 の服飾に関する出来事とも関連して、時期ごとの特色も見られる。

占領期の 7 年間が終わって、サンフランシスコ講和条約が発効すると、日本各地に基地が設けられた。1952 年以降の基地周辺にいるパンパンは、クリスチャン・ディオールのニュールックを思わせるウエ

ストをマークしたロングワンピースやスカートである。

また、基地周辺で国際恋愛や国際結婚があり、そのような女性は外国人兵士の隣にいる女性ということで「パンパン」と一括りにされて、その女性のような服飾を「パンパンスタイル」と呼んだのではないだろうか。

敗戦直後の占領期を通じて「パンパンスタイル」というような特定のスタイルは存在しなかった。着用していた服飾はいずれもパンパンの特徴ではなく、数年後には多くの女性もそのような服飾をしていたと思われる。多くの女性との違いは、モノクロでもわかる濃い口紅やかき眉、タバコを吸っている姿といえる。1950年代以降の映画などのパンパンの衣装は、占領期が終わった後の華やかなロングスカートの服飾が採用され、繰り返し上映されることにより人々に印象づけていったのである。

5. 結論

「パンパンスタイル」「パンパンルック」と呼ばれる服飾は、かならずしも当時のパンパンが身につけていた服飾ではない。1950年代以降に、終戦直後を描いた映画や再現では、占領末期の1950年代に基地周辺にいた女性のアメリカンスタイル（アメリカン・ルック）を採用して、より華やかにアレンジしている。それらの映像内の衣装がのちの時代の人々に派手で華やかな「パンパンスタイル」として認識された。それらは物資のなかった終戦直後の本当のパンパンの姿ではないものと結論付ける。

引用文献

- 1) 渡辺明日香：ストリートファッション論 日本のファッションの可能性を考える，産業能率大学出版部，189 (2011)
- 2) ジョン・ダワー：増補版 敗北を抱きしめて（上），岩波書店，148 (2004)
- 3) うらべまこと：流行うらがえ史，文化出版局，29 (1982)
- 4) 黄益九：占領と肉体の密会 肉体の門が物語る戦後，筑波大学比較・理論文学会文学研究論集，24，132 (2006)
- 5) 影山光洋：昭和の女 戦争と平和の四十年，朝日新聞社 (1965)
- 6) 影山光洋：写真昭和 50 年史，講談社 (1975)
- 7) 横浜都市発展記念館：奥村泰宏・常盤とよ子 写真展 戦後横浜に生きる，横浜市ふるさと歴史財団 (2018)
- 8) 平塚柊緒：写真でわかる事典 日本占領史，PHP エディターズ・グループ (2019)
- 9) 文献 2)，142
- 10) 貴志謙介：戦後ゼロ年 東京ブラックホール，NHK 出版，117 (2018)
- 11) 文献 10)，123
- 12) 文献 2)，147-148
- 13) 茶園敏美：パンパンとは誰なのか キャッチという占領期の性暴力と GI との親密性，インパクト出版会，85 (2014)
- 14) 文献 13)，90
- 15) 文献 10)，108
- 16) 昭和館学芸部：昭和館特別企画展「時代をまとう女性たち」図録，32 (2023)
- 17) Kovner, S.: *Occupying Power: Sex Workers and Servicemen in Postwar Japan*, Stanford University Press, 58 (2012)
- 18) ジョン・ダワー：増補版 敗北を抱きしめて（下），岩波書店，183 (2004)
- 19) 文献 5)および文献 6)参照。
- 20) 文献 10)，310
- 21) 柳洋子：ファッション化社会史 ハイカラからモダンまで，ぎょうせい出版，277 (1982)
- 22) 文献 3)，29
- 23) 増田美子：日本服飾史，東京堂出版，160 (2013)
- 24) 井上雅人：洋裁文化と日本のファッション，青弓社，33-34 (2017)
- 25) 文献 24)，49
- 26) 文献 24)，34
- 27) 文献 18)，88
- 28) 文献 3)，43
- 29) 文献 3)，53
- 30) 文献 18)，341
- 31) 文献 16)，40
- 32) 文献 24)，56
- 33) 檀原照和：消えた横浜娼婦たち 港のマリーの時代を巡って，株式会社データハウス，206 (2009)